事例Ⅰ－1　森林総合監理士による集約化に向けた路網構築への技術支援

鳥取県では、既設路網の沿線を中心に間伐等の森林施業を実施してきたが、施業地の奥地化に伴い、搬出コストが増加しており、施業の実施が難しくなっていた。

奥地の森林における施業を進めるためには、集約化団地の設定と路網の検討が必要であり、森林総合監理士が中心となって「路網のあり方検討会」を開催し、地域の森林組合と共に、森林GISを活用した集約化団地の設定や、ICTを活用した路網設計支援ソフト(FRD)を用いた路網の検討を行った。

検討を進める中で、路網の新設ではなく、幅員が狭い、橋梁(りょう)の規格が小さい等の理由により利用されていない既設の林道や農道、公道を改良し、活用することが有効であることが判明したことから、これらの道路に関係する市町の担当職員を検討会のメンバーに加え、既設道路の課題を共有し改良の提案を行うなど、路網計画について意見交換を行った。これにより、既設道路の改良を含めた実行性のある路網計画が作成されるとともに、集約化団地の設定が進み、これを核とする森林経営計画の作成にもつながっている。

同県では、地域の森林組合等が引き続き効率的な路網の配置や利用を実現し、集約化の取組を進めていけるよう、今後も地域の関係者と連携しながら森林総合監理士による技術支援等を行っていくこととしている。

QGISを用いて検討する「路網のあり方検討会」